

学 位 論 文 要 旨

研究題目 (注: 欧文の場合は、括弧書きで和文も記入すること)

Effectiveness of 7-day versus weekday-only rehabilitation for stroke patients in an acute-care hospital: A retrospective cohort study

(急性期脳卒中患者における 365 日リハビリテーションの効果)
リハビリテーション科学 (指導教授又は研究科紹介教授 道免 和久)

氏 名 中空 智子

【目的】

急性期脳卒中患者に対する早期からのリハビリテーションは強く推奨されている。我々は、急性期脳卒中患者に対する連日の高頻度のリハビリテーションは機能回復の改善と関連し、機能回復の重要かつ正の関連因子であると仮定した。この仮説を検証するため、高頻度および標準頻度のリハビリテーションが急性期脳卒中患者の機能回復に及ぼす影響を後ろ向きコホート研究で検討した。

【方法】

2010年10月から2014年9月まで、脳梗塞または脳出血のいずれかを経験し、その後リハビリテーションを受けた入院患者を診療録より後方視的に分析した。我々はリハビリテーション頻度と日常生活動作の改善との関連性を検討した。日常生活動作の改善度の指標として、Barthel index effectiveness を使用した。本臨床試験は三宿病院の医学倫理委員会に申請し承認されている(承認番号 2016-05)。

【結果】

脳梗塞の患者 661 人と脳出血患者 245 人を分析した。高頻度リハビリテーション群は脳梗塞患者で 321 人、脳出血患者が 121 人であった。Barthel Index effectiveness は、脳梗塞後の高頻度リハビリテーションを受けた患者で最も高かった(平均値 0.60、標準偏差 0.34)。更に多変量線形回帰分析は、Barthel Index effectiveness が脳梗塞患者の高頻度リハビリテーション(係数 0.072; 95%信頼区間 0.019-0.126; $P=0.0083$)と有意かつ正の相関があることを示した。脳出血患者の治療プロトコール間で Barthel Index effectiveness に有意差はなかった。

【結論】

本研究は、脳梗塞の患者において高頻度リハビリテーションがより大きい機能回復をもたらすことを実証した。一方、急性期脳出血の患者において高頻度リハビリテーションの有効性は実証できなかった。本研究は、実臨床場面における多数例での急性期脳梗塞患者の高頻度リハビリテーションと機能回復の間の関連を実証した初めての報告である。